

フォノカートリッジ部 (Concept MM) ●発電方式:MM型 ●出力電圧:3.3mV (5cm/sec、1kHz) ●インピーダンス:660Ω ●針圧:1.9~2.5g ●自重:8g
 トーンアーム部 (Verify) ●型式:スタティックバランス型 ●適合カートリッジ
 自重:2.5~17g ●ターンテーブル部 ●駆動方式:ベルトドライブ ●回転数:
 33・1/3、45、78rpm ●寸法/重量:W420×H140×D350mm / 7.5kg
 ●問合せ先:ヨシノレーディング株式会社 050(3375)3975

クリアオーディオ Concept

¥198,000(セット)

音楽に柔軟に対応する軽快なサウンド。よく弾む音が楽しい
 MM型フォノカートリッジを標準装備した、クリアオーディオのアナログプレーヤー

小野寺弘滋



ドイツのクリアオーディオは、現在世界最大級のアナログ機器メーカーと言ってもよい。本国では、ターンテーブルだけでも20モデルを超え、リニアトラッキング型を含むトーンアームも数多く揃えるなど、超弩級機からエントリー機までの幅広いラインナップを擁している。

本機「コンセプト」は、同社のエントリライインに位置づけられるアナログプレーヤーシステム。薄いアルミ製と思われるサブプラッターをDCモーターでベルトドライブし、30ミリ厚のメインプラッターには、最近ヨーロッパで注目されているPOM（ポリオキシメチレン）樹脂を採用。

トーンアームは極めてユニークで、磁力を利用した独自のマグネットベアリングテクノロジによって、フリクションを排除。おそらく、アームパイプの回転軸付近を、軸受ヨーク上部に仕込まれた磁石で常に引っ張り、アームの位置決めは、パイプ下部に取り付けられたワイアーで行なうという構成だろう。これは一種のフロート

有利に働くはずだ。MM型カートリッジが付属し、調整は工場出荷時に施されているため、セットした瞬間からレコード演奏ができる。

音楽ソースに柔軟に対応する軽快なサウンド。とりたててワイドレンジというわけではないが、中域中心の音調バランスは大変に好ましいもので、よく弾む音が楽しい。サウンドステージも広大とまではいかないけれど、3次元のバランスが取れているため、不足感を抱かせないのである。

モーターの動作音がやや気になるが、再生上のS/Nはよく、ハウリングにも強い。

情報量の多さを誇示するサウンドではないので、マニアックな聴き方には不満も出よう。だが、本機のほどよいバランスは評価できるものであり、この価格帯における優秀機として注目に値する。

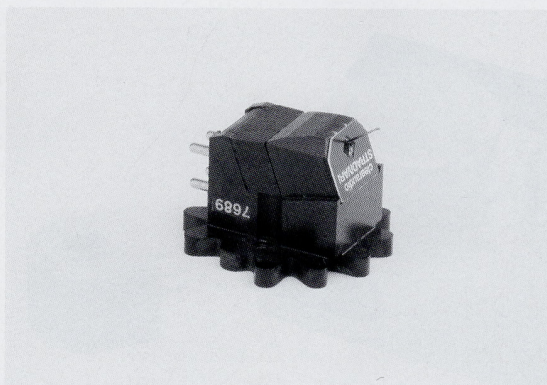


本機に付属するスタティックバランス型トーンアームVerify。軸受け部は、機械的接点を持たず、磁力を用いた独自の方法を採る。ワイアーの張力を調整することで、インサイドフォースの調整も可能である。

●発電方式:MC型 ●出力電圧:
0.7mV(5cm/sec、1kHz) ●インピー
ダンス:30Ω ●適正針圧:2.8g ●自
重:7g ●問合せ先:ヨシノトレーディ
ング株式会社 050(3375)3975

クリアオーディオ Stradivari

¥450,000



ゴージャスで安定感あるリッチな味わい。文句なしに素晴らしい
コイルに純金を用いた、クリアオーディオのMCフォノカートリッジ

和田博巳

ドイツのアナログ専門メーカー、クリアオーディオのストラディヴァリというMCカートリッジは、価格が45万円とひじょうに高価だ。てっきりこれが同社のトップエンドと思ったら、何とこの上にまだ3機種あり、最高級モデルはゴールドフィンガーという178万円のカートリッジであった。というわけでストラディヴァリは、同社のカートリッジの中ではミドルクラスに位置するが、音は文句なしに素晴らしかった。

同社のMCカートリッジのカンチレバーすべてボロン製だが、ボディの材質は様々で本機はエポニー製である。ちなみに上位モデルは、アルミ/セラミック、チタン、14K金とすべて金属製だ。このストラディヴァリはアコースティック楽器やヴォーカルの再現に注力してチューニングされたとのことだが、本機がウッドボディを採用するのは、明確なコンセプトに基づいているわけである。

このストラディヴァリを含む同社の高級カートリッジで目に付くもう一つの特徴に、「12フィンガー・ヘッド」というのがある。これはヘッドシェルに接するベース部分が、12本の小さな角を持ったヒトデの様な形状となっているのを意味しており、その理由は解像度を増し、歪を抑えるために、それぞ

れのフィンガーの山と谷の曲率を微妙に変えてレゾナンスを最適化している、ということのようだ。

プレーヤーはリン・ソンドックLP12、フオノイコライザーアンプはアキユフェーズC27で、まずは私の定盤、ヴィクター・フェルドマンの『ジ・アライヴァル・オブ』から。音はエポニー・ボディと純金コイルの支配力が強いのだろうか。中低域に厚みがあつて躍動感溢れるウエストコーストジャズとなった。スクラッチノイズが楽音にまわりつかないのも嬉しい。

マチート楽団の『ファイアー・ワークス』から、ラロ・ロドリゲスのヴォーカル曲は、軽快なラテンビートに乗せて、血の通った伸びやかな歌声がまことに気持ちよい。バックのソノラ編成(トランペット3本のアンサンブル)も金粉を振りまいたような華やかさで、スポーツライトを浴び輝いている。

『ラモー・サンフォニー・イマジネール』の特徴的なティンパニも、低音の深々とした厚みと共に、空気をブルンと震わせ、その残響音が空中に長く漂う。

カリカリにチューンしたスポーツカーのような音ではなく、高級サルーンカーの如きリッチで安定感のある音は見事というほかなく、上位モデルもぜひ聴いてみたい。